

【電子かわら版 チャペル・アワー No.007】 2020年5月26日(火)

* Chapel Message : 2020 Spring Semester English Chapel *

毎年学期に一度、全てを英語で行う English Chapel を行っています。2020年春学期は、今週のチャペルを English Chapel として、Richard Maher 先生にメッセージをお願いしました。いつものように、聖書を開けて読み、メッセージを味わって、一緒に紹介している賛美歌や楽曲、絵画作品などを、リンクを辿って鑑賞してください。まずは、メッセージは英語で。24時間後を目処に、翻訳を掲載します(山本版)。今週のメッセージのための聖書と楽曲は、マハー先生がご自身で選ばれました。賛美歌と絵画は山本が選びました(祈りも私が書きました)。

★Bible This Week : Amos 5: 8 and Psalm 139: 12

(今日は二か所読みます。どちらも旧約聖書「アモス書」と「詩編」です。)

★Hymnal This Week : 550番 <https://www.youtube.com/watch?v=xTIH8IAqGAQ>

(楽曲と録音に関しては文末の解説を参照)

★Anthem This Week: “Seek Him That Maketh the Seven Stars” (Dove)

<https://www.youtube.com/watch?v=PcW3o2DXxms>

(Messageの中で取り上げられているので、読む前と読んでからと2回聴いてみて下さい)

★今週のアート : 「Histoire universelle depuis la Création jusqu’à César」

「天地創造から皇帝の時代までの普遍的な歴史」(フランス、1390~1400年ごろ) 羊皮紙・手書き写本。Pierpont Morgan Library 所蔵の Manuscript マイクロフィルム・コレクション.M.516 より、イラストの部分。神が「幾何学者・設計士」として宇宙を創造し、天に星や天体を配置している、という「創世記1章」を基にしたイラスト。

<http://ica.themorgan.org/manuscript/page/1/143608>

★ “Seek Him”

The very first time I heard “Seek Him That Maketh the Seven Stars” was during a visit to York Minster with Nijima students on the Short Study in England program (イギリス短期留学). York Minster is an amazing English Gothic cathedral that was built from 1220-1472. We attended “Evensong”: an evening service that features a lot of music. It was a Sunday so there was a full choir. The scene was set.

I remember only little bits of the service. However, there was one hymn that I will never forget: “Seek Him That Maketh the Seven Stars,” composed by Jonathan Dove. From the moment the organ’s hypnotic first notes began, I became interested. There was soft choral singing, but I didn’t understand the words. The hymn continued. Two words were repeated many times. Softly and then loudly. What were they? “SEEK HIM.” Like any great long tune that takes the listener on a journey, the musical peaks and valleys (both mood and volume) were superb; slowly building and falling, lifting us up, compelling us forward, and setting us down – both gently and abruptly – again and again.

My eyes closed at some point. The music was enveloping. I became lost in the moment, in the music coming from the organ’s 5,403 pipes and in the voices. “SEEK HIM. SEEK HIM.” And then I was not in my chair. I was no longer in York Minster. Nothing existed, except for the music. “SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM.”

As the hymn ended, so slowly, so beautifully, it was as if I was gently delivered back home, like an infant being returned to its mother; back to safety, peacefulness, and calm. And then it was over and I was back. Back in the Minster. I opened my eyes. I was back, but I have never been the same. From that short, profound experience I had re-acquired a sense of serenity that had been lost somewhere along the way.

Months later, I looked at the Evensong program and checked the title and composer online. Here are the lyrics:

“Seek Him that maketh the seven stars and Orion and turneth the shadow of death into the morning. Alleluia, yea, the darkness shineth as the day, the night is light about me. Amen.”

The hymn begins as a meditation about the night sky: specifically the Pleiades (プレアデス星団、すばる) . We have all looked at the night sky, wondering and imagining. There is so much dark space, but there are billions of lights. However, there can be no light without darkness. And to truly appreciate light we need to understand darkness.

I think that this song becomes quite important in dark days such as now. Things have become confusing, difficult, scary. Yet this hymn reminds us that light conquers darkness. There is hope; we should not despair. Morning always follows night. But, even in the darkness there is light. “Alleluia, yea, the darkness shineth as the day, the night is light about me.”

I hope you will listen to the attached YouTube file. I recommend using headphones and turning up the volume. For me, it is a complete chapel “hour” in 7 minutes and 15 seconds.

【祈り】 God of the darkness, we seek you groping, desparately. Give us wisdom and courage to look up to the starry sky above us, and convince us that you are surely there. For you are our God who makes night shines like day, and turns the shadow of death into the dawn of new ilfe. Amen.

* Youtube 録画で聴く「今週の賛美歌」について

Earth and all Stars (作詞：Herbert Brokering, 作曲：David Johnson)

演奏されている編曲については Harmony: American Songs of Faith © Albemarle Records

アメリカ・ミネソタ州にある、アメリカ福音ルーテル教会を母体とする総合大学、St. Olaf University の 90 周年記念のために、文学部教授であった Brokering が作詞、音楽学部長であった Johnson が作曲した賛美歌。

* 「今週の Anthem : Seek Him」について

Ely Cathedral Choir が Ely Cathedral(英国国教会イーリー市司教座教会)で 2017 年 2 月 2 日に行われた Candlemas で演奏したもののライブ録画。Anthem(礼拝のための合唱曲)の作曲者は Jonathan Dove(1959~)。アモス書 5:8 と 詩編 139 編の言葉を歌詞の土台としている。

彼 (=神) を探し求めよ、すばるとオリオンとを創造された方を

死の闇を、夜明けへと導き、変える方を。(アモス書より)

ハレルヤ (ヘブライ語で「神をたたえよ」)、暗闇も真昼と同じく輝き、

私にとっては夜も明るい。

アーメン。(詩編より)



【日本語（意）訳】 by 山本有紀

「探し求めよ、神を」

私が初めて“Seek Him That Maketh the Seven Stars”を聴いたのは、新島学園短期大学のイギリス短期留学プログラムの引率で、ヨーク・ミンスターを訪れた時でした。ヨーク・ミンスターは素晴らしいイギリス・ゴシック様式の大聖堂で、1220年から1472年に亘って建築されました。私たち新島学園短期大学の一行は、Evensong(イーヴン・ソング)と呼ばれる、たくさんの音楽を含む夕方の礼拝に参加しました。その日は日曜日だったので、フルメンバーの聖歌隊が歌うことになっていました。舞台は整えられていたのです。

私は、礼拝全体についてはほんの少ししか覚えていません。しかし、一曲、忘れることができない賛美歌がありました。それが、Jonathan Dove 作曲の、“Seek Him That Maketh the Seven Stars”（神を探し求めよ、すばるをおつくりになった方を）でした。オルガンが、まるで私たちが催眠術にでもかけようとするかのような前奏を演奏しはじめたその瞬間から、私はこの曲に強く興味を惹かれました。そして、静かな合唱パートがはじまりましたが、私は歌詞を理解することができませんでした。合唱は続きます。その中で2つの言葉が何度も何度も繰り返すたわれていることは解りました。その言葉は時に優しく、そして時に大きく強く歌われます。なんと歌っているのでしょうか？“SEEK HIM.”（彼を探し求めよ）聴き手を「旅」に連れ出すことができる、長く壮大な楽曲はどれもそうであるように、この合唱曲も音楽的な峰の高みや谷への降下（形式についても音量にしても）は素晴らしいものでした。音楽は何度も何度もゆっくりと高みへ昇り、また緩やかに降り、私たちを押し上げ、また前進するように積極的に押し出し、そして優しく、そして突然に着地させました。

ある時点で、私は目を閉じました。音楽が、まるで封筒が手紙を包み込むように、私を包み込んでいました。私はその瞬間にすっかり心奪われ、5403本もの笛（パイプ）から流れ出る音楽と、合唱の声の中に心身を委ねました。“SEEK HIM. SEEK HIM.” 私は最早、椅子に座っている、とうい感覚はありませんでした。ヨーク・ミンスターにいる、という感覚もありません。そこには、もう何も無い、ただ音楽だけが存在していたのです。

“SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM. SEEK HIM.”

これ以上ないほどゆっくりと、そしてこれ以上ないほど美しく、合唱が終わった時、私は、まるで、優しく抱かれて故郷に連れ帰ってもらったかのような気持ちでした。それは、例えば小さな赤ちゃんが、お母さんの懷に再び抱かれるような、なんの心配もない、平和と静謐の中に迎ええられるような感覚でした。確かに、戻ってきました、でもその時、私は、その合唱を聴くという体験をする前の私と同じ私では、最早ありませんでした。端的に言うなら、いつの間にかすっかり忘れてなくしてしまっていた serenity= (心の) 晴朗さ、という感覚を、この profpund=意味深長な体験によって、私は再び取り戻すことができましたのです。

この経験から何か月か経ってから、この日のイーヴン・ソングのプログラムを見返して、この合唱曲の題名と作曲者を確認オンラインで検索しました。そこでやっと歌詞をすべて見つけました。

彼 (=神) を探し求めよ、

すばるとオリオンとを創造された方を。

死の闇を、夜明けへと導き、変える方を。

ハレルヤ (ヘブライ語で「神をたたえよ」) !

暗闇も真昼と同じく輝き、私にとっては夜も明るい。アーメン。

この合唱曲は、まず、夜空について瞑想するところから始まります。特に Pleiades (プレアデス星団、すばる=七つの星で構成されているように見える。日本では冬の天頂近くの星座) に、詩人は注目します。私たちも (想像のなかで) 夜空を見上げ、あれこれと思いめぐらし想像します。空はこんなに闇が深いのに、そこには何十億もの光が輝いています。闇が存在しなければ、光も存在しません。そして、真実に光の存在を喜ぶためには、闇について私たちは知る必要があるのです。

私は、今日、皆さんと聞いたこの合唱曲は、今現在のような「闇の日々」の中では、きわめて重要な意味を持つものだと思うのです。社会の様々な事柄が混乱しており、難解に思え、恐ろし気です。しかし、この賛美歌 (合唱曲) は、光が闇を打ち破る、ということを私たちに思い起こさせてくれます。そこには、確かに希望があります。だから、私たちは絶望してはならないのです。夜の後は、必ず朝がやってくるのですから。そして、それだけでなく、暗闇のただ中にも光は存在するのです。「ハレルヤ、そうだ、暗闇も真昼のように輝き、私にとっては夜も明るい」。

皆さんも、どうか、この Youtube のリンクから、この曲を聴いてください。ヘッドフォンを付けて、音量は大きめで聞くことを勧めます。私にとっては、この 7 分 15 秒の音楽のなかに、チャペル・“アワー (=1 時間)” がすっぽり収まるような気分です。

【Prayer】

暗闇の神さま、

私たちは手探りで、必死に、あなたを探します。

私たちに知恵と勇気をください、

私たちの頭上に広がる、星空を見上げるために。

そして、私たちを確信させてください、

あなたが確かにそこにいてくださるのだ、と。

あなたこそ夜を昼のように輝かせ、死の暗闇を新たな命の夜明けに変える方なのですから。

アーメン。

*** 欧米語の文法としては「神」は男性名詞なので、代名詞も Him.ただしそれは文法上のことで、神が男性である、ということ指している証拠にはならない (はずなのですが)。**